様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　１日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21530925
研究課題名（和文）　[伝統的な言語文化]の系統的指導における日本の基層文化概念の活用

研究課題名（英文）　How to utilize the base-course of Japanese culture when we teach about “Japanese traditional language culture” systematically ?

研究代表者
藤森　裕治（FUJIMORI YUJI）
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：00313817

研究成果の概要（和文）：以下の通りである。
① 海外の母語教育における関係実践・教育課程の事例研究が遂行された。
② 新学習指導要領の完全実施年度に先行して発達段階に応じた［伝統的な言語文化］の系統的指導案が提示され，学会・研修会等で発信された。
③ 小中学校を中心に，のべ 90 校での研究授業指導・講演が行われ，本研究の成果が学校関係者に還元されるとともに，学習指導要領解説の記述等にあたっても活用された。

研究成果の概要（英文）：As follows
① A case study of the practice and the curriculum in the native language education in foreign countries was accomplished.
② The systematic teaching plan of [the traditional language culture] according to the developmental stage that preceded with the full enforcement fiscal year of the new course of study was constructed and presented at a society, study session, etc.
③ By the class instruction and the lecture in 90 elementary and junior high schools have deed, the result of this research were returned to a school official and were utilized in description of government-guidelines-for-teaching.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：国語科教育学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：日本の基層文化，教科書研究，伝統的な言語文化，古典教育，学習指導要領，民俗文化論，萬葉集研究，Literacy

１．研究開始当初の背景

(1)日本の基層文化概念について

日本の基層文化に関する議論は民族学・民俗学・古典文学研究・歴史学等、さまざまな学問分野を横断して幅広く行われてきた。これら先行研究が提示した日本人の人間観・自然観・人生観等を批判的に検討しつつ、我が国の基層文化に対して適切な認識を得ることは、改訂教育基本法に謳われている郷土を愛する心の基盤を形成するとともに、今後国際社会における役割がますます重くなっていく我々日本人の揺るぎない価値規準を自覚する上で、きわめて重要な作業である。

本研究に先立ち，報告者らは日本の基層文化に関する先行研究を通覧すると共に、国語教科書に登場する日本文化関連語彙及び教材を悉皆調査し、その傾向特性を分析してきた。これを深化・発展させ、外国の状況を視野に入れながら、日本の基層文化概念に対する文化相対主義的な位置づけを行い、国際協調の観点から〔伝統的な言語文化〕を扱う必要がある。

(2)〔伝統的な言語文化〕の課題

平成 20 年 3 月、小学校・中学校における改訂学習指導要領が告示され、国語科では[言語事項]と記されていた指導事項が[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]に改称された。改称に際しては研究代表者の藤森も指導要領の改善協力者として加わり、日本の基層文化と「言語文化」との関係について報告し、議論する機会を得ている。その中で自覚された喫緊の課題は、今次の改訂で新設された指導事項[伝統的な言語文化]を、初等中等教育の全体にわたって具体的にどう展開するかという点である。全校種にわたるこの指導事項を具体的にいかなる系統性に配慮した学習活動と教材配列で構成するかという点についての見通しは急を要する。なぜなら多くの実践現場では［伝統的な言語文化］の目的が古典教育の重点化にあるという認識しかなく、小学校の教員からは教材に古典が加わることへの不安の声が少なからず聞かれるからである。このような状態のまま新指導要領の完全実施に至れば、［伝統的な言語文化］の指導の意義や系統性が十分に理解されず、学習活動の進め方や教材選定に苦慮する実践現場が多数出現する事態が懸念されよう。これでは高校生の 70%に及ぶ「古典」嫌いを助長することになりかねない。

２．研究の目的

本研究の目的は，日本の基層文化概念に対する知見をもとにして，〔伝統的な言語文化〕の系統的な学習指導をより適切に行うための実践的知見を得ることにある。その際、本研究は[伝統的な言語文化]＝古典文学といった前提を保留し、これを「日本の基層文化に根ざして継承され維持されてきた生活様式・価値観・倫理観・美的感覚・認識の仕方等」と位置づけ直す。さらに、国際協調の精神を養うとする指導要領の指針を生かし、海外の初等中等教育において自国の伝統的な言語文化に関する指導がどのように行われているかを調査し、その実態や特性を検討する。これらの取り組みにより、いかにすれば新時代の国語科における[伝統的な言語文化]の指導が我が国の伝統と文化を正当に理解するための系統性をもち得るかについて解明する。また、それによって学習者が自文化中心主義に偏ることなく自己を適切に認識し、激動する国際社会に自信をもってかかわることのできる言語人格を育成することのできる学習指導の創成を目指す。

３．研究の方法

(1) 海外の母語教育における関係実践・教育課程の検討

欧州の母語教育における関係実践・教育課程の調査研究として、England に注目する。England ではシェイクスピア演劇の系譜をひくドラマ教育や、伝統文化をテーマとするトピック学習が伝統的に行われており、ナショナル・カリキュラムにも母語教育の一環としてドラマ教育が位置づけられている。本研究ではイギリス教育水準局の査察で最高水準と評価された初等中等学校と BESA(イギリス教科書教材供給公社)への訪問調査を行い，England の学校における指導の実際、教育課程、教科書等に関する情報を調査・分析する。

アジアの母語教育における関係実践・教育課程の調査研究として、台湾に注目する。台湾は第二次大戦以前には日本の統治下として日本国政府の教育施策下にあり、今日では IT 関連企業の世界的中心地として我が国と深い経済的関係にある。このような地域における古典教育観を知るために、本研究では台湾花蓮市の慈済大学及びその附属初等中学校における古典文学の教育課程と実践事例を調査・分析する。

(2) 〔伝統的な言語文化〕の指導系統表の作成と実践化

小学校「国語」から高等学校「国語総合」に至る学習指導要領を精査し、［伝統的な言語文化］の記述内容にどのような系統性が見出されるか、平成 19～20 年度研究成果をもとに分析する。これに海外の調査結果を参照しながら、文化相対主義的な立場から［伝統的な言語文化］を指導するための構成概念を検討する。

これにあわせ、小学校「国語」から高等学校

「国語総合」までの発達段階をふまえ、［伝統的な言語文化］の指導系統表を作成し、新指導要領の完全実施年度に先行して実験授業を行う。

４．研究成果

(1)2009 年度

①欧州の母語教育における関係実践・教育課程の事例研究として，England の初等中等学校，及び教育関係機関への実地調査を行った。具体的には，England における伝統文化としてチューダー朝時代に注目し，現地の小学校(Wroxham Primarily School)にて丸一日参加観察を行った。その結果，算数から国語，家庭科，理科を総合した伝統文化のトピック学習がほぼ全体像として記録され，［伝統的な言語文化］を初等教育機関で実践する際の示唆を得た。

②我が国の伝統と文化に深いかかわりをもつアジア地域として，台湾への実地調査を行った。具体的には，花蓮市の慈済大学及びその附属初等中学校における古典文学の教育課程と実践事例の取材，また，台湾で小学校から大学まで過ごした劉晏君氏(現筑波大学大学院)への聞き取り調査を行い，［伝統的な言語文化］に関連する学習歴をライフストーリー研究としてまとめた。その結果，台湾における［伝統的な言語文化］の教材系列，学習指導の一般像，日本文化の受容における傾向などを聞き取ることができた。

③［伝統的な言語文化］の記述内容に関する系統性を見出すための実践的研究として中学校と高等学校における授業研究を実施した。日本の伝統文化を表象する同一教材をそれぞれの教育実践場面で取り上げ，学習者の反応においてどのような差違が見られるか分析を行った。その結果，中学生にあっては［伝統的な言語文化］の履修にアプロプリエーション概念の導入が有効であること，高校生にあっては個の内面的な思考の深化に学習指導上の力点が求められることなどが示唆された。

(2)2010 年度

①海外における［伝統的な言語文化］の追調査として England の小学校における伝統的な言語文化に関連する学習指導の実態について追調査を行った。新政権下における新しい教育施策の動向を我が国の研究者としていち早く把握するとともに、変化する状況の中で一貫して行われている市民性教育・宗教教育・PSHE を取材し、伝統的な言語文化としてクリスマスの諸行事が教育課程にどう取り入れられているのかを実地調査した。

②［伝統的な言語文化］の系統性と抽出された構成概念の関連づけとして、小学校「国語」から高等学校「国語総合」までの発達段階を縦軸に、2009 年度の研究成果として抽出された構成概念を横軸にして［伝統的な言語文化］の系統的指導における相関マトリックスを提示し、学会等で発信した。

③授業研究と学会発表では、平成 19～20 年度に実施した現行教科書悉皆調査結果、関連文献等をもとに、国語教科書における基層文化概念について日本民俗学会で学会発表を行った。また、2010 年度中に小中学校を中心にのべ 30 校での研究授業指導･講演を行い、本研究の成果を学校関係者に還元した。学習指導要領解説の記述に際しても活用された。

(3)2011 年度

① 日本の基層文化の文化相対主義的な位置づけと［伝統的な言語文化］の構成概念の導出として、伝統や文化に関する言語教育を展開している海外の事例としてイギリスにおけるトピック学習及び宗教教育・市民性教育の実態を調査し、それとの比較を通して［伝統的な言語文化］の系統的指導を貫くべき日本の基層文化における構成概念を導き出した。成果は学会発表及び講演等で還元した。

②［伝統的な言語文化］の系統的指導における学習活動と教材系列の検討として、［伝統的な言語文化］の系統的指導と学習活動及び教材との相関を検討し、小学校・中学校における当該学習指導を教材系列にまとめた。その成果を著書、論文、国語教科書編集等で社会的に還元した。

③［伝統的な言語文化］の指導系統表の作成と教材・単元の具体的提示及び実践的検証として、以下の成果を得た。

・附属学校における公開研究会を通して具体的な指導系統表及び学習指導法を提案し，これを社会的に公開した。

・国語教育に関連する複数の学会で〔伝統的な言語文化〕にかかるワークショップを行い，実践関係者の意識啓発と教材開発を示した。

・各地の教育委員会，教育研究会での招待講演を通して，〔伝統的な言語文化〕にかかる研究成果の具体的な説明及びワークショップを行い，その普及につとめた。

(4)研究全体を通しての成果と今後への展開

当初計画の主目的である，日本の基層文化概念を伝統的な言語文化の系統的指導に活用することについて，本研究の担当者は，双方が文部科学省の教育課程及び学力に関する調査協力の役職を得，国の教育課程や学力観の形成にとって根幹的な部分で本研究における研究成果を反映させ得た。国立教育政策研究所主催で行われる全国的な説明会等では，本研究によって開発した教材や学習指導法が紹介され，実際に各地での実践が試みられている。また，本研究の一大特徴として取り組んだ海外との教育比較では，現地校の

授業観察を踏まえた研究発表を繰り返し，我が国の今後への進展に貢献し得ている。特に，2011 年度はイギリスの人格教育・価値教育の実践場面をも視野に入れた調査研究を行い，伝統的な言語文化の学習指導を通して，市民としての自覚をいかにはかるかという問題について踏み込んだ知見の示唆をなしえている。

本研究課題は平成 24 年度～27 年度の科学研究費補助金（基盤研究(B)）において，「基層文化概念を核とした〔伝統的な言語文化〕の系統的実践モデルの構築」を課題とした共同研究に発展する。新しい学習指導要領は，平成 24 年度に中学校で，同 25 年度から 27 年度にかけて高等学校で完全実施年度を迎える。本研究は，この完全実施年度に併行して，各学校の連携と系統性を踏まえた実践モデルの構築をもって一つの完成を迎えることになる。

この間，本研究の特徴である海外との教育比較は継続して行うが，昨今の社会情勢は余談を許さない状況になっており，例えばイギリスでは 2010 年の政権交代に伴い，これまでの研究成果のかなりの部分が再検討を余儀なくされている。この問題に対しては，オセアニア圏まで視野に入れた調査研究地域の拡大をはかり，一地域に限定されない広範な情報収集をもって対応する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）

1. 西一夫、『伊勢物語』教材研究―「初冠」試解―、信州国語教育（長野県国語教育学会）、82 巻、pp.100-102、2011 年、査読無
2. 藤森裕治、「思考・判断・表現」の能力としての「書く能力」、日本語学（明治書院）、30 巻、pp.52-61、2011 年、査読無
3. 藤森裕治、国語科でコミュニケーション力を育てる、指導と評価、57、pp.9-12、2011 年，査読無
4. 藤森裕治、英国の総合学習における交流活動と学習形態、月刊国語教育研究（日本国語教育学会）、458 巻、pp.4-9、2010 年、査読無
5. 藤森裕治・西一夫、「伝統的な言語文化」に着目した授業研究の構想と展開、授業研究アリーナで共創する「臨床の知」（信州大学教育学部）、pp.31-49、2010 年、査読無
6. 藤森裕治、課題探究能力としての言語力、月刊国語教育（東京法令）、30-1、pp.22-25、2010 年、査読無
7. 藤森裕治、英国型害ガイデッドリーディングのすすめ、実践国語研究（明治図書）、302 号、pp.9-10、2010 年、査読無
8. 藤森裕治、読書の技術を育てる教材開発、教育科学国語教育（明治図書）、720、pp.65-67、2010、査読無
9. 西一夫、工業高等専門学校「国語」における言語活動、月刊国語教育研究（日本国語教育学会）、456 巻、pp.22-27、2010 年、査読無
10. 藤森裕治、小学校国語教科書におけるキツネの形象に関する民俗文化論的考察―なぜキツネが教科書に最も多く出現するのか―、読書科学（日本読書学会）、Vol52、No.2、2009 年、査読有

〔学会発表〕（計１９件）

1. 藤森裕治、国語科授業研究における学習者研究の方法論、第 121 回全国大学国語教育学会、2011 年 10 月 30 日、高知大学
2. 藤森裕治、中学校の国語科授業を活性化する、ことばと学びをひらく会、2011 年 10 月 1 日、慶應義塾大学三田校舎
3. 西一夫、書儀・尺牘表現の受容―平安初期漢文書簡の表現を中心に―、和漢比較文学会、2011 年 9 月 25 日、筑波大学
4. 藤森裕治、言語文化に着目した授業作り、日本国語教育学会第 74 回全国大会、2011 年 8 月 9 日、品川区立小中一貫校
5. 藤森裕治、単元的発想で言語力を育てる、東京都青年国語教育研究会、2011 年 7 月 9 日、港区立青南小学校
6. 藤森裕治、単元的発想で育てる感性的思考力、日本国語教育学会、2011 年 6 月 17 日、上田市立第四中学校
7. 藤森裕治・新井浅浩、イギリス初等中等学校の授業実践と教材づくり、全国教育研究所連盟研究発表大会、2011 年 6 月 3 日、ホテルライフォート札幌
8. 藤森裕治、キーコンピテンシーとしての伝統的な言語文化、第 120 回全国大学国語教育学会、2011 年 5 月 28 日、京都教育大学
9. 藤森裕治、国語科教育における各国のデジタル教科書事情、国語と情報教育研究プロジェクト、2011 年 1 月 29 日、内田洋行新川オフィス
10. 藤森裕治、Key Competency としての伝統的な言語文化、信州大学国語教育学会、2010 年 11 月 27 日、信州大学教育学部
11. 藤森裕治、国語の授業を活性化する工夫について考える、ことばと学びをひらく会、2010 年 10 月 23 日、慶應義塾大学
12. 藤森裕治、国語教科書の狐―学校教育における民俗文化論的考察―、第 60 回日本民俗学会年会、2010 年 10 月 3 日、東北大学
13. 藤森裕治、〔伝統的な言語文化〕の授業作り、日本国語教育学会第 73 回全国大会、2010 年 8 月 10 日、二松学舎大学

14. 西一夫、古典文学で学ぶ―「浦島太郎」から広げる―、長野県図書館協会、2010年6月30日、長野県須坂高等学校
15. 西一夫、万葉集の歌人たち、信州和歌文学会、2010年6月30日、上田女子短期大学
16. 藤森裕治、学校、教科を越えて生きて働く言語力とは何か、日本国語教育学会、2010年6月16日、中野市立豊井小学校
17. 藤森裕治、学習者中心主義の国語教育、日本国語教育学会富山支部大会、2010年2月13日、富山市高志会館
18. 藤森裕治、England初等中等学校における文学の読みの授業、日本読書学会第53回大会、2009年8月6日、筑波大学学校教育局
19. 西一夫、「学士力」とは何か―大学初年次教育で目指す「学士力」の構築：信州大学１年次教育―、日本国語教育学会、2009年6月27日、筑波大学附属学校教育局

〔図書〕（計６件）
1. 藤森裕治　他33名、新しい教科書の新しい教材を生かして思考力・判断力・表現力を身につけさせる、学文社、2011年、pp.166-173
2. 藤森裕治　他7名、評価規準をどう創るか、明治書院、2011年、pp.125-134
3. 藤森裕治　他31名、国語単元学習の創造、東洋館出版社、2011年、239pp.
4. 藤森裕治・鳴島甫・高木展郎・入部明子・菊川恵三　他８名、明治書院、高等学校学習指導要領の展開、2010年、pp.54-56, 127-129, 143-144, 157-158, 171-172, 185-186
5. 藤森裕治、国語科授業研究の深層、東洋館出版社、2009年、pp.1-305
6. 石塚修編・西一夫他3名、明治図書、[小学校]知っておきたい古典名作ライブラリー32 選―豊かな＜伝統的な言語文化＞の授業づくり―、2009年、pp.18-33, 114-121

〔その他〕
ホームページ等
http://soar-rd.shinshu-u.ac.jp/profile/ja.HCVbhkF.html

６．研究組織
(1)研究代表者
藤森　裕治(FUJIMORI　YUJI)
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：００３１３８１７

(2)研究分担者
西　一夫(NISHI　KAZUO)
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：２０４２２７０１

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：